

「赤水晶マーク」採択の意味

赤十字標章を巡る国際的論争の一世紀

世界中で広く知られる赤十字マーク（赤十字標章）は、ジュネーヴ諸条約により武力紛争時に医療活動を行う要員や施設を識別する国際保護標章である。しかし今日では、赤十字標章の他、多くのイスラームを信仰する国では赤新月（赤い三日月）標章が使用され、さらに2005年12月7日に採択されたジュネーヴ諸条約第三追加議定書により、赤十字と赤新月のどちらも使用を望まない国のために新たに赤水晶（Red Crystal）標章の使用が認められることになった。

赤十字標章が軍の衛生機関の保護標章として採用された1864年のジュネーヴ条約の採択当時、赤い十字の標章に宗教性をみる者はいなかった。しかし、条約締結国が非西欧社会のイスラームを信仰する国にも広がる過程でその宗教性を巡り激しい議論が交わされてきた。そうした中で生まれた赤水晶標章は、この問題を恒久的に解決する切り札であるといわれる。

本来ならば、武力紛争時の衛生活動を国際的に保護するためには、各国が統一した識別標章を使用することが重要であるにもかかわらず、3つの異なるシンボルが存在するという現実、人道主義を基調とし普遍的であるはずの国際赤十字・赤新月運動が国家的、民族的、宗教的な自己主張の中で翻弄されてきた歴史を物語るものともいえる。

トルコの加入と赤新月標章の承認

1864年のジュネーヴ条約が成立した時、赤十字標章に異議を唱える国はなく、トルコ政府も1865年7月、留保なしで条約に加入した。しかし、1875年8月、トルコの属州だったボスニア、ヘルツェゴビナ、ブルガリア3州によるトルコへの反乱が隣国のキリスト教国をも巻き込み、トルコとの戦闘が激化（バルカン戦争）すると、1876年11月、トルコは条約寄託国のスイス政府に対し、トルコの衛生部隊はイスラーム教のシンボルである赤新月標章を使用することを一方的に通告した。キリスト教のシンボルと酷似する赤十字標章は、トルコ兵には尊重されず、使用できないというのが主張だった。ロシアの参戦で戦局が激化する中、赤十字国

日本赤十字秋田短期大学教授 井上 忠 男

際委員会（ICRC）は傷病者保護という現実的な見地からこの要求に妥協せざるをえなかった。それが130年におよぶ標章を巡る議論の発端だったといえる。

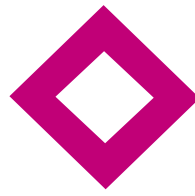
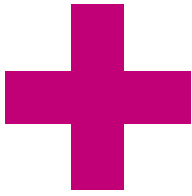
その後、パーレビ王朝下のイランが王朝の紋章である赤獅子太陽標章の使用を求めようになり、トルコとイランは、1906年のジュネーヴ条約改訂の折に、両国が要求する標章を条約で承認するよう求めたが、反対多数で実現しなかった。イスラームを信仰する国らの度重なる主張に辟易とした欧州諸国は、赤十字標章には宗教的な意味がないことを条文中に明記すべきだとのフランス代表の発言をきっかけに、1906年の改訂条約の第18条に「スイスに敬意を表するため、スイス連邦の国旗の配色を転倒して作成した白地に赤十字の紋章は、・・・」の文言を挿入し、赤十字標章が宗教的な背景とは無関係であることを改めて宣言した。しかし、1907年8月に同条約に加入したトルコも、またベルシアもエジプトも加入に際し第18条を留保したため、実質的にこの2国は赤新月と赤獅子太陽標章を使用する権利を確保した。

条約の一部留保という手段により、独自の標章を使用してきたこれらの国々は、第一次世界大戦後の1929年にジュネーヴ条約改訂の折、赤新月と赤獅子太陽を条約で正式に承認するよう再び要求した。この提案に対し、日本、フランス、イタリア、オランダをはじめ多くの国は賛成し、同提案に反対したICRC、およびチリ、ルーマニアの主張は少数派となった。そしてエジプトの提案により「しかし、既に十字の代わりに新月と赤獅子太陽を使用している国にあっては・・・」と、両標章の使用を認める旨の表現が、条約第19条に挿入されたのである。

こうして以後、赤十字標章と赤新月標章、赤獅子太陽標章（イランは現在は使用していない）は、ジュネーヴ諸条約により正式に使用が承認されたのである。

イスラエル建国とダビデの赤盾標章

第二次世界大戦後、イスラエルが建国されると保護標章の問題に新たな火種が生まれた。すでに1930年か



ダビデの赤盾標章

赤十字標章 (1864年採択) 赤新月標章 (1929年採択) 赤水晶標章 (2005年採択) 過去に使用された未承認の標章例

ら独自の宗教的、歴史的背景を持つ「ダビデの赤盾 (Magen David Adom)」の紋章を救護社の標章として使用してきたイスラエルは、1949年、ジュネーヴ条約改訂会議に同標章の正式な使用を認める条約草案を提案した。

会議の主要意見は、1) 新たな唯一の統一標章を採択し、標章問題を解決しようとする提案(オランダなど)、2) 再び赤十字標章のみに戻るべきだという提案(ICRC)、3) 第四の標章としてダビデの赤い盾を承認するイスラエルの提案に大別された。オランダは複数の標章が存在することの混乱を強調し、唯一の解決策は新たな統一標章を採択することだと主張し、独自に逆三角形の中に赤いハート形を入れた標章を提案した。これに反対してICRCは、すでに80年以上も世界で認知されてきた赤十字標章を放棄することは支障が多いとして赤十字標章に再び統一すべきだと主張した。これにはトルコ、エジプト、アフガニスタンが激しく抵抗した。またイスラエル提案には、これ以上保護標章の数が増えることを懸念したベルギーが強く反対し、この標章が承認されればさらに新たな標章の使用を要求する国が出ると警告した。仏教国で赤十字を使用していたタイは、もし、ダビデの赤い盾が承認されれば、アジアやその他の国々も独自の標章を使用する権利を主張しだすだろうと発言した。結局、イスラエル提案は僅差で否決され、イスラエルのダビデの赤盾社は、新設社は既存の3つの標章のいずれかを使用しなければならないという新設社の承認条件を満たすことなく、国際赤十字・赤新月運動への仲間入りが閉ざされてきた。

この状況を打開するために、イスラエルはダビデの赤盾社の国際承認を求めるアメリカの支援を得ながら戦後一貫して外交交渉を重ねてきた。国家的、宗教的背景を持つ保護標章の承認だけは絶対に避けたい

ICRCや中東のイスラム諸国等の強い反対により「ダビデの赤盾標章」そのものの承認は困難となった。しかし、ICRCが提案した宗教的な意味を持たない赤水晶標章はイスラエルも受け入れるところとなり、この使用を認めるジュネーヴ条約第三追加議定書が2005年12月に採択され、イスラエルもこれに加入、さらに2006年6月、イスラエルのダビデの赤盾社は、国際赤十字によりパレスチナ赤新月社と同時に承認されることになった。これによりイスラエルは、武力紛争時には赤水晶標章を保護標章として使用し、ダビデの赤盾社は、自社を表示するマークとして赤水晶の中の空白部分にダビデの赤盾標章を挿入して使用することとなった。この発想は、元々1949年の国際会議でニカラグア代表が提案したもので、当時は協議されることもなく立ち消えたアイデアだった。今後、独自の標章を使用したい国がでた場合には、この赤水晶を使用することとし、これにより標章を巡る議論に最終的な解決策が見出されたことになった。

国際的論理に翻弄された人道主義のシンボル

被保護者を識別する保護標章は、世界で統一されていることが好ましいことは明らかである。しかし、人道という普遍的な価値を世界に広める赤十字運動の特色は、国際的であるとともに多様な文化横断的な視点を取り込みながら発展してきた点にある。それが最も象徴的に凝縮されたのが、運動の視覚的シンボルともいえる識別マークはいかにあるべきかという標章を巡る議論だったといえる。

赤十字は、歴史の産物として自己主張しあう国際社会の中で翻弄され、闘ぎあいと妥協を余技なくされてきた。それは赤十字の普遍性の限界かもしれないが、より高次の理想や目的のためには、理想と現実の乖離を乗り越える知恵と柔軟さが必要なることをも示している。曰く、「赤十字は、理想と現実の幸福な結婚である」。